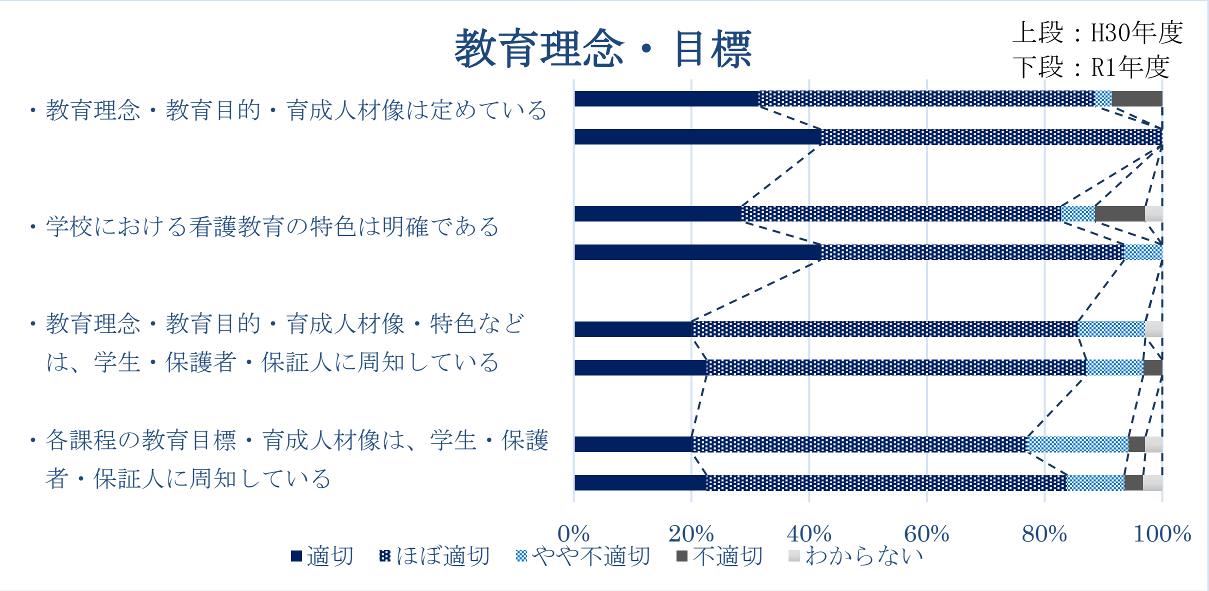
京都府医師会看護専門学校

令和元年度　自己点検・自己評価

Ⅰ．教育理念・教育目標・人材育成　N=31

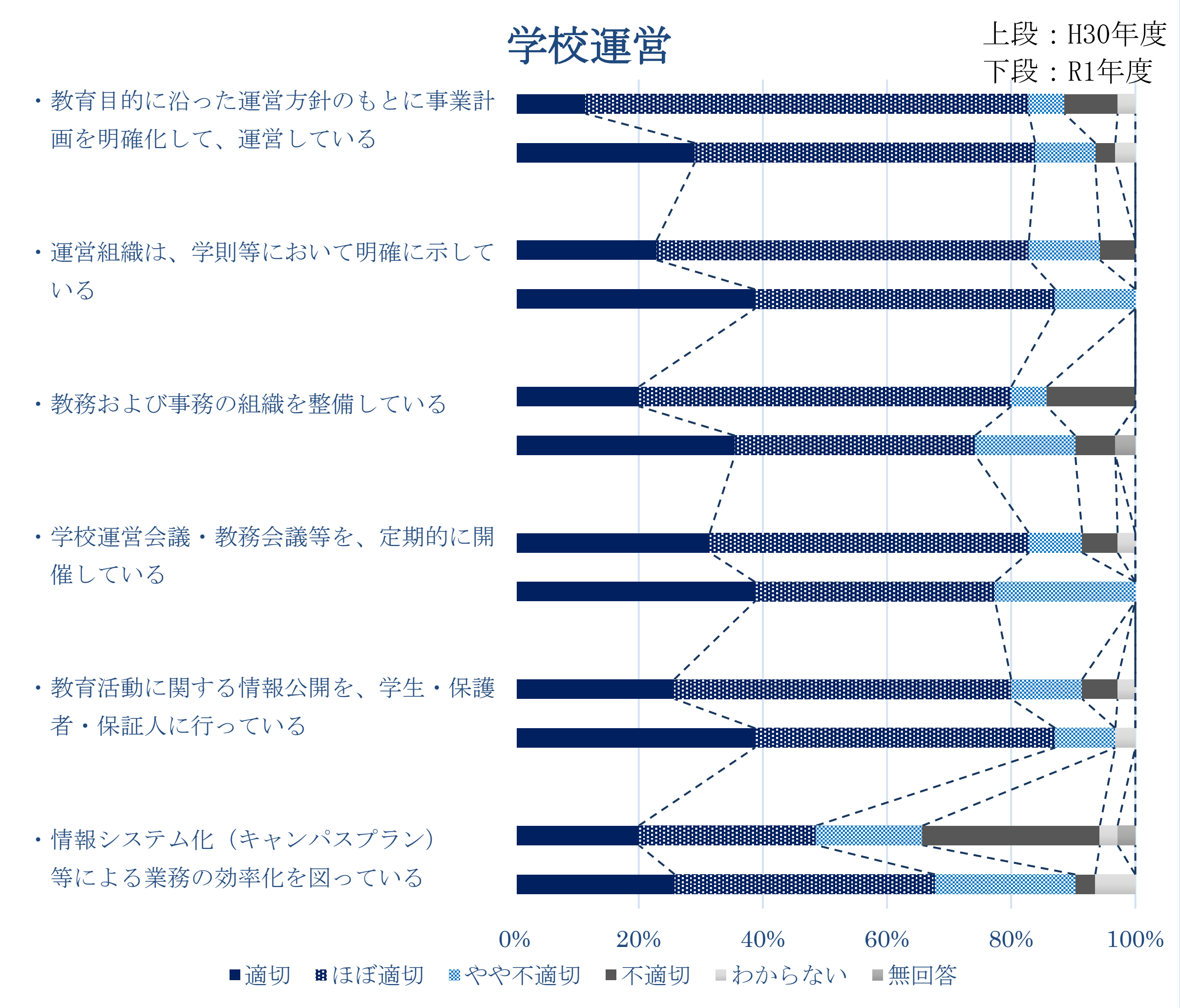
（１）教育理念・目標



自己評価	外部評価
教育理念・目標について、殆どの項目で「適切」「ほぼ適切」と高評価になっている。 「看護教育の特色」について、90%以上が「適切」「ほぼ適切」で、「やや不適切」「不適切」「わからない」が昨年度より減少している。 「学生・保護者・保証人に周知している」は、さまざまな方法で努力していることが浸透しつつあり、「やや不適切」が昨年より減少している。今後もより多くの方が理解できるよう説明の強化や、入学式、保証人会、HP などで外部に発信できるよう工夫することが必要となる。	昨年度もお伝えいたしましたが、慈愛・知性・勇気を基盤とされている教育理念は、将来の看護業務においてなくてはならない資質を端的に表現されている、大変素晴らしいものであると考えます。また、学生・保護者への浸透が向上しているということは、種々の手法が奏功しているものと思われます。 どの項目も、昨年より改善されている。今後、新型コロナウイルス感染症のこともあり HP 等を更に工夫をして学校の方針など浸透させる必要がある。 教育理念・目標：適切・ほぼ適切が前年度よりも上昇し、80%以上を占めており問題ないと思います。 教育理念・目標は高い評価で維持しており看護師の育成に大きく貢献されていると思います。保護者・保証人への周知に関しては昨年より減少しておりますので今後もＨＰなどで発信していただければと思います。

Ⅱ組織運営

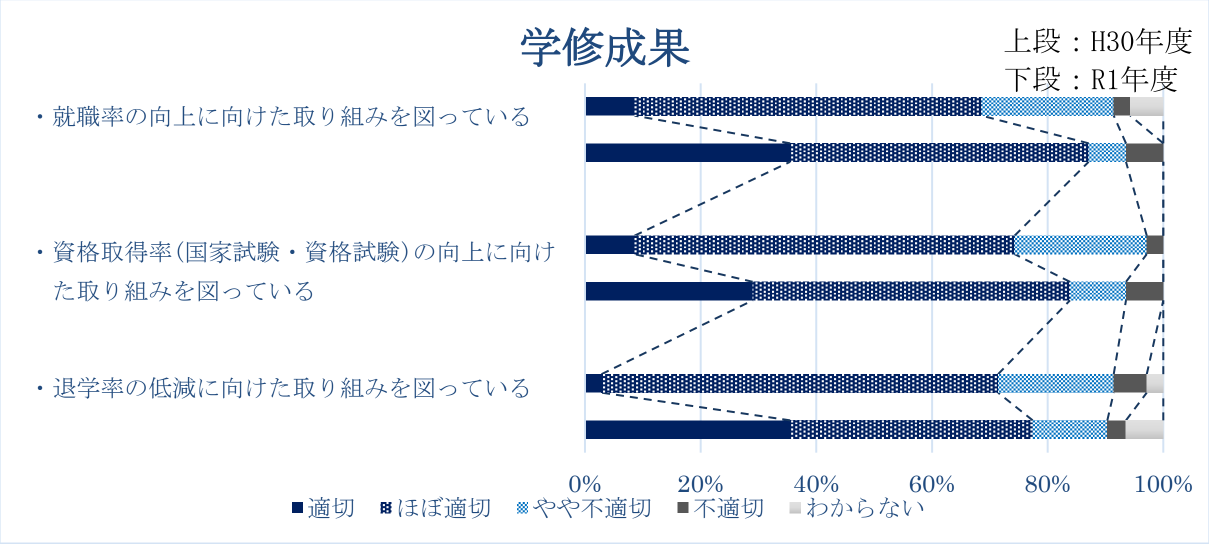
（１）学校運営



自己評価	外部評価
学則や教育の事業計画の明確化・教育活動の情報公開については80%以上が適切・ほぼ適切と評価しており昨年度に比較して改善傾向にある。改善できた要因には学校運営を計画通りに運営できている結果であると考える。学則運営の実際や教育実践の経過や結果報告の情報を発信していることを教員間でも周知でき始めていると考える。しかし、組織の整備や情報システム化などの業務の効率化については適切・ほぼ適切が70%前後であり、昨年度よりも改善している部分もあるが、十分であるとは言えない。 情報システム化については昨年度に比較し、ソフトの操作技術も獲得し、業務の効率化は進んでいるが、教員全員の獲得には課題がある。業務の効率化は教育の向上を目指すための時間確保にも関わるため、教員間で操作技術を共有するなど今後のレベルアップが重要となる。	計画通りに学校運営を為されている点、さらに実践の経過や結果について教員間の周知を図られている点は、同じ学校運営を進める者として、敬意を表します。一方、教員全員のソフト操作技術習得はコロナ禍において大変重要なテーマとなると考えます。 学校の組織運営については改善されている事がうかがえる。昨年度課題であった、情報システムについては、教員の方々が操作 技術を獲得されてこられており業務の効率化は進んでいると思われる。 情報システム化について適切・ほぼ適切で大きく上昇し、前々年のシステム変更に伴う低下は解消できていると考え、活動の継続で問題ないと思います。 組織運営につきましては８０％以上の評価で個人的には適切に行われ

	ていると思っております。今後は新型コロナウイルス感染症の影響もあり学校運営会議・教務会議等を開催される事も難しくなるかとは思いますが頑張っていただきたいと思います。

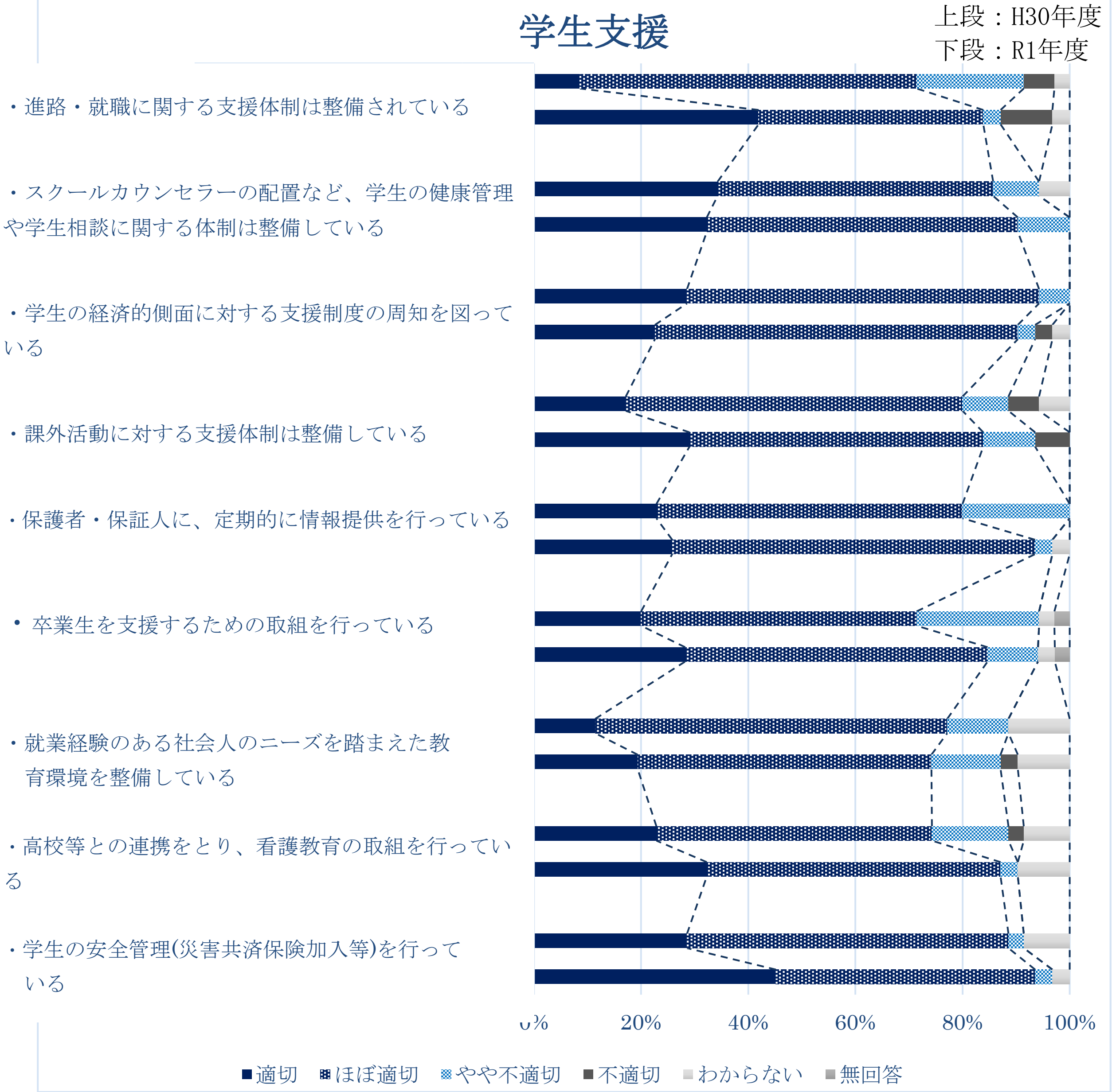
（２）学修成果



自己評価	外部評価
「就職率の向上に向けた取り組みを図っている」については、適切・ほぼ適切が 87.1%で、昨年度より増加している。反対にわからない 5.7%が今年度０％へ、不適切・やや不適切が半減している。近年、施設の就職試験の早期化が進み、希望する施設への就職が難しいケースが増えている。現状を踏まえ、教員からの声掛けを強化するなど、早期就職活動にむけての動機付けがされた結果、就職フェアへの参加の増加（130 人参加）や、ナースセンター担当者の講義聴講者が増加した。教員においても上記の活動が周知された結果であると考える。 また、昨今の経済事情から、奨学金制度のある施設への希望者は年々増加しており、早期に就職活動に臨む学生が増加している。進学においても、経済的理由からストレートに進学する学生の減少につながっている。 「資格取得率（国家試験・資格試験）の向上に向けた取り組みを図っている」については、適切・ほぼ適切が 74.3%から 83.8%へ増加している。全科、低学年から、助産学科においては入学時より、国家試験・資格試験対策の内容検討や学習方法の指導に力を注いでいる。最高学年においては、試験対策の時期や内容を検討しながら、模擬試験結果の分析を繰り返し、外部講師の協力も得つつ、学習支援を実践している。同時に、メンタル面のサポートが必要な学生も多く、担任を中心に個別支援も実践している。その結果、前年度より合格率アップへつながっているが、100%合格に向けて、全教員でさらなる支援の強化を図っていきたい。 「退学率の低減に向けた取り組みを図っている」は、適切・ほぼ適切が 71.5%から 77.4%へ増加している。しかし、わからないが 2.9%から 6.5%	学校において、出口戦略（進路保障）は最も重要な柱であると考えます。就職試験の早期化により希望施設への就職が容易ではない中、取組に対する満足度が向上していることは素晴らしい成果であると思います。さらに、資格取得率の向上についても成果を上げておられ、一層の躍進を期待するところです。 ところで、「強い進路変更希望」が退学理由の上位にあると言うことを伺い、高等学校としても校内の指導及び貴学をはじめとする看護医療系学校との連携を強化する必要があると感じるとともに省を促したいと存じます。 合格率は改善されている。専門学校として資格取得率は重要であり引き続き強化頂きたい。 今年度は新型コロナウイルス感染症の影響もあり 100%合格に向けて支援を強化頂きたい 退学率への取り組みについては、若年層の意思決定であり、社会一般にみられる傾向である。適切が全体的に上昇し、教員の努力と実感が伺えます。また、国家試験合格率についても全国平均を上回るなど、成果が出ており、活動の継続を期待します。 資格取得（国家試験・資格試験）の向上に向けた取り組みについては適切・ほぼ適切との回答が増加している。今後も早い段階で試験対策を行

へと増加している。 　退学の理由としては、強い進路変更の希望によるものや成績不振、家庭の事情、健康上の理由である。退学を決断する前に、入学直後からの学習支援やスクールカウンセラーへの適切な時期での相談など、対応の必要がある。同時に、関わる教員が退学率低減の認識を持てるよう、教員間の情報共有に努め、学生個々の状況に合わせた適切な対応を適時に実践していく必要がある。	い全教員・そして生徒自身も努力し１００％合格を目指していただきたいと思います。退学者の低減については個々に色々な事情があり難しいと思います。学校側としては状況に合わせた対応を適時に実践していただけたらと思います。

（３）学生支援



自己評価	外部評価
全９項目のうち、７項目で「適切・やや適切」とする回答が前年度より増加しているが、「経済的側面での支援制度の周知」と「就業経験のある社会人のニーズを踏まえた教育環境」については前年度に比べ、若干低下している。学科により社会経験のある入学生が増え、個別に学生生活（育児・仕事との両立等）へのアドバイスを行っているが、主に担任や主任が対応するため、全教員の認知に至っていないことが要因と考えられる。一方、社会人入学生が減少している学科（３年課程）では、これらの支援の必要性の認知が低いものと考えられる。また、教育訓練給付金制度の指定を受けていることで本校への入学を希望する学生がおり、入学後、実際に給付を受けることができている。 経済的側面での支援制度については、学生支援機構・京都府看護師等修学資金、京都府高等学校等修学	社会人学生に対する教育環境の整備という点で、限られた教職員による対応に留まっているとのことです。小職の教え子も少なからず御校に「社会人学生」としてお世話になっておりますが、そう言ったニーズに応えるためにも体制強化を図られることを期待しております。 学生アンケートにおいては、授業内容や教員全般については昨年より改善している。学生を取り巻く環境は、厳しくなっており教員の体制も厳しいと思うが支援を更に強化して頂きたい。卒業生に対する支援についても、離職防止対策として、就職先である施設と

資金など、対象学生を集めて説明会を実施している。さらに、多くの学生が適正に受給できるよう成績等の条件を精査して個別に対応し、給付を受けることで学業を継続できている学生も少なくない。しかし、現役生の多い学科（３年課程）では親の支援のもとに入学している学生が多いため、支援制度を活用する必要性を感じていないことがこの結果につながったのではないかと考える。 　メンタルサポートをスクールカウンセラーに依頼する機会はこれまでにも増加傾向にあった。 教員がカウンセリングの必要性などを見極め、学生にとって必要なタイミングでカウンセリングを受けることが大きな意味をもたらすため、教員がスクールカウンセラーとうまく情報共有し、更に適切な依頼ができることが望まれる。	連携を強化して取り組んで頂きたい。 　各専門学校（看護学校に限らず）、今年度の社会の経済状況も踏まえると多大な影響が及ぶことが考えられるが、学生の経済的問題に関して、教員も一緒に考え活用できる社会的支援を紹介するなど、新しい方法提供などを期待したいと思います。就職支援についても、医療や看護現場の経済的状況や、社会的偏見等厳しくなると思いますが、良い成果に繋がることを期待します。 　学生の支援をしていただけることは、学生の目標にもつながるため色々な方面で学生の支援体制を整えていただき、情報を提供していただければと思います。 　他の大学のように学校全体が Wi-Fi の使用ができる環境が整えば良いのにと個人的には思います。(できておりましたらすみませんがこの意見はなしでお願いします)

カムバックスクール

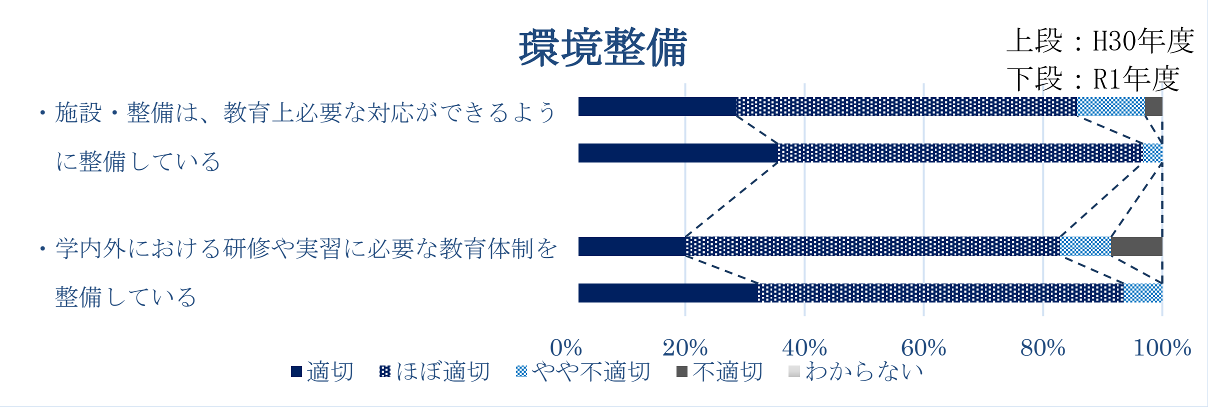
令和元年８月５日(月)　13：30～15：00

講演テーマ：「災害支援ナースへの道－災害看護について－」

講　師：東野谷孝好　先生　　社会福祉法人恩賜財団 済生会滋賀県病院

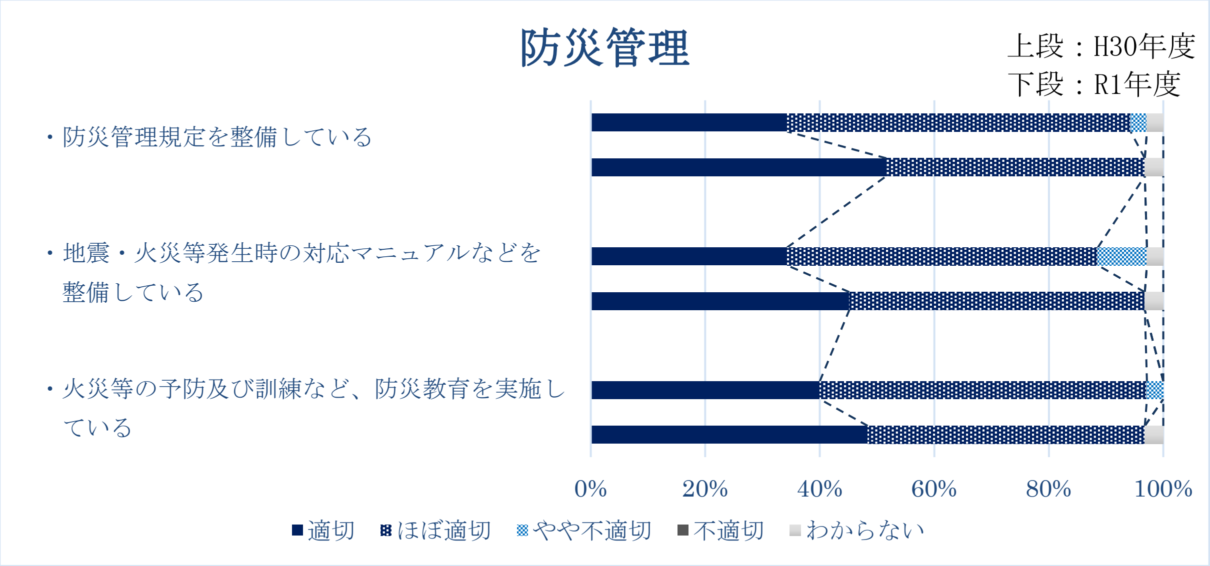
（４）教育環境

ア　環境設備



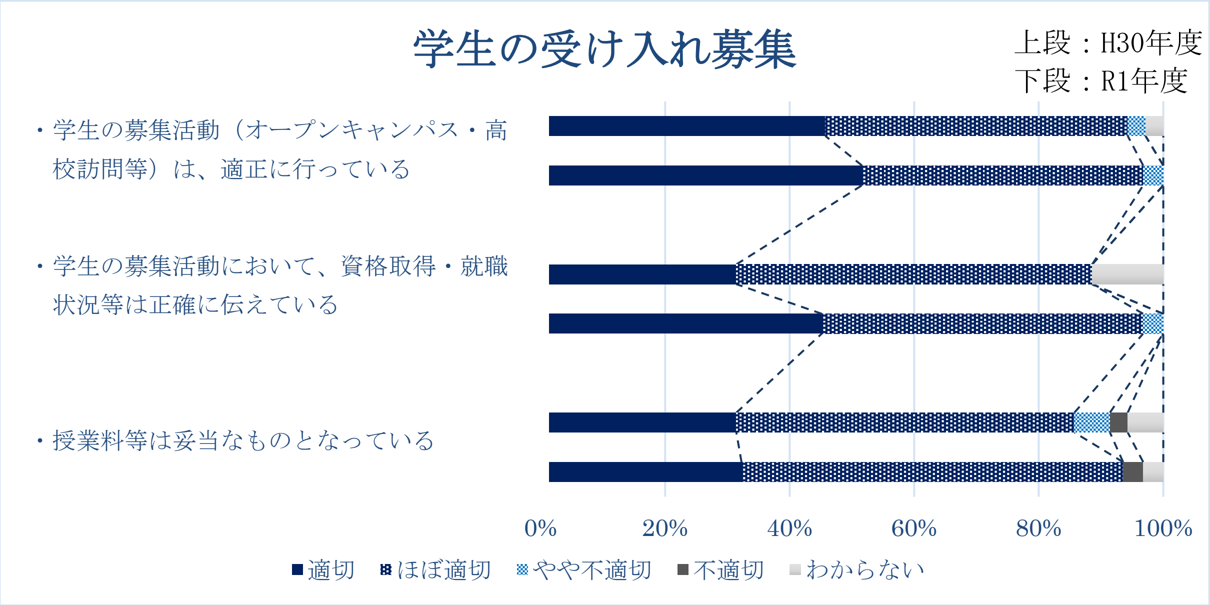
自己評価	外部評価
「設備・設備は、教育上必要な対応ができるよう整備している」は、適切・ほぼ適切が 96.8%であった。学生が使用する図書の点検や補充が行えていることや学内実習で使用するシミュレーター機器の購入などによって適切とする比率が高まったものと推測する。また学生が利用するスクールカウンセリングの開室時間も延長しており、学生の精神的なフォローに活かされている。しかし、学内で学生が長年使用しているパソコンやロッカー、学内演習での備品などの老朽化があり、使用しづらくなっている。長期間使用している備品の整備が今後の課題である。 「学内外における研修や実習に必要な教育体制を整備している」では 93.6%が適切、ほぼ適切との回答であった。学内でのシンポジウムは、教員全員が意見を述べやすい環境を作るため、経験年数を踏まえてシンポジストを選定したことで活発な意見交換が行えた。また、必要な研修に教員が参加し、参加後は、会議などで伝達講習を行い、研修内容を共有している。各教員がお互いに業務を調整し、学外の研修に参加しやすい環境が整備されていると考える。	学生にとって、施設・設備面の充実は大変重要であると考えます。老朽化している備品等の改善を促進され、満足度が一層向上することを期待いたします。 研修や実習の満足度も高いポイントとなっていますが、今年度はコロナ禍ということもあり、困難を極めておられることと存じます。また、このことは予見が難しく、複数年にわたる対処が肝要になるかと存じます。そのあたりのフォロー体制が不可欠であろうと考えます。無論、これについては先方（受け入れ先）の事情が許せばと言うことになろうかと存じますが。 新型コロナウイルス感染症の影響もあり、学内実習環境は計画的に整えていく必要があると思われる。 学校見学をさせていただいた際、学生の学習環境にはとても配慮されていると感じました。図書室も利用できることもあり、自主学習を進める上でも非常に心強い環境だと思います。

イ　防災管理



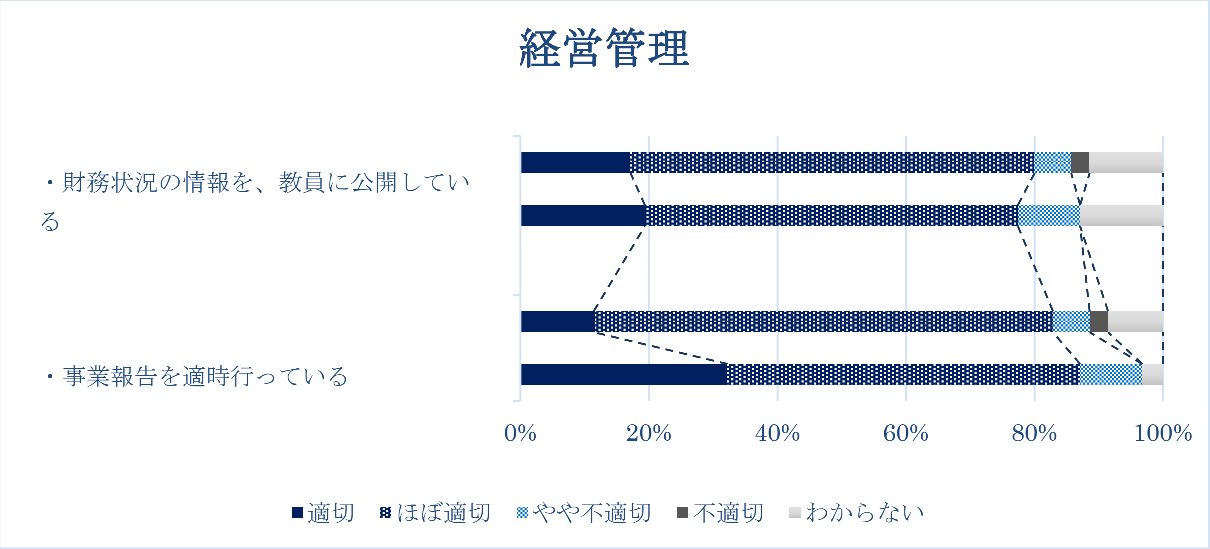
自己評価	外部評価
防災管理は、適切・ほぼ適切と回答していることが大多数であるが、すべての項目に「わからない」が3.2%認められる。 今年度は京都府に大きな災害はなかったが、もしもの場合に備えて各課程で緊急連絡網を作り、学生と連絡を取れる体制を構築している。また、学生には災害時などの連絡事項はホームページ閲覧するように周知しており、大多数で適切・ほぼ適切との結果となったと推測する。また、重要書類に関しては、緊急時持ち出し袋、または持ち出しファイルを作成し、緊急時には持ち出すこととしている。 「わからない」が3.2%あることの原因については、訓練当日、臨地実習などの指導のため不在となり参加できない場合があることによるものと思われる。2020年、新型コロナ感染防止対策として、卒業式の縮小化、卒業パーティの中止が決断された。学生の楽しみや区切りの行事であったが、感染防止対策が必要な緊急事態に関しての措置については今後も早急に検討し適切な対応をしていく。	新型コロナウィルス感染拡大の収束が遠い状況の中、引き続き前例のない対応を迫られると存じます。 また、豪雨・台風等の自然災害についても一層ご留意いただければと存じます。 新型コロナウイルス感染症によるクラスター、院内感染は捉えようによっては災害であり学生に正しい知識を教育頂きたい。新型コロナウイルス感染症の感染防止対策については、変化してきている為、状況に合わせて何回も行って頂きたい。 災害時なども視野に入れ、そして新型コロナウイルス感染防止対策、本当に色々と大変だと思いますが適切な対応をされていると思います。 不審者の侵入対策も休み時間等、学生が自由に出入り出来るのであれば対応策があってもよいかなと思います。

（５）学生受け入れ募集



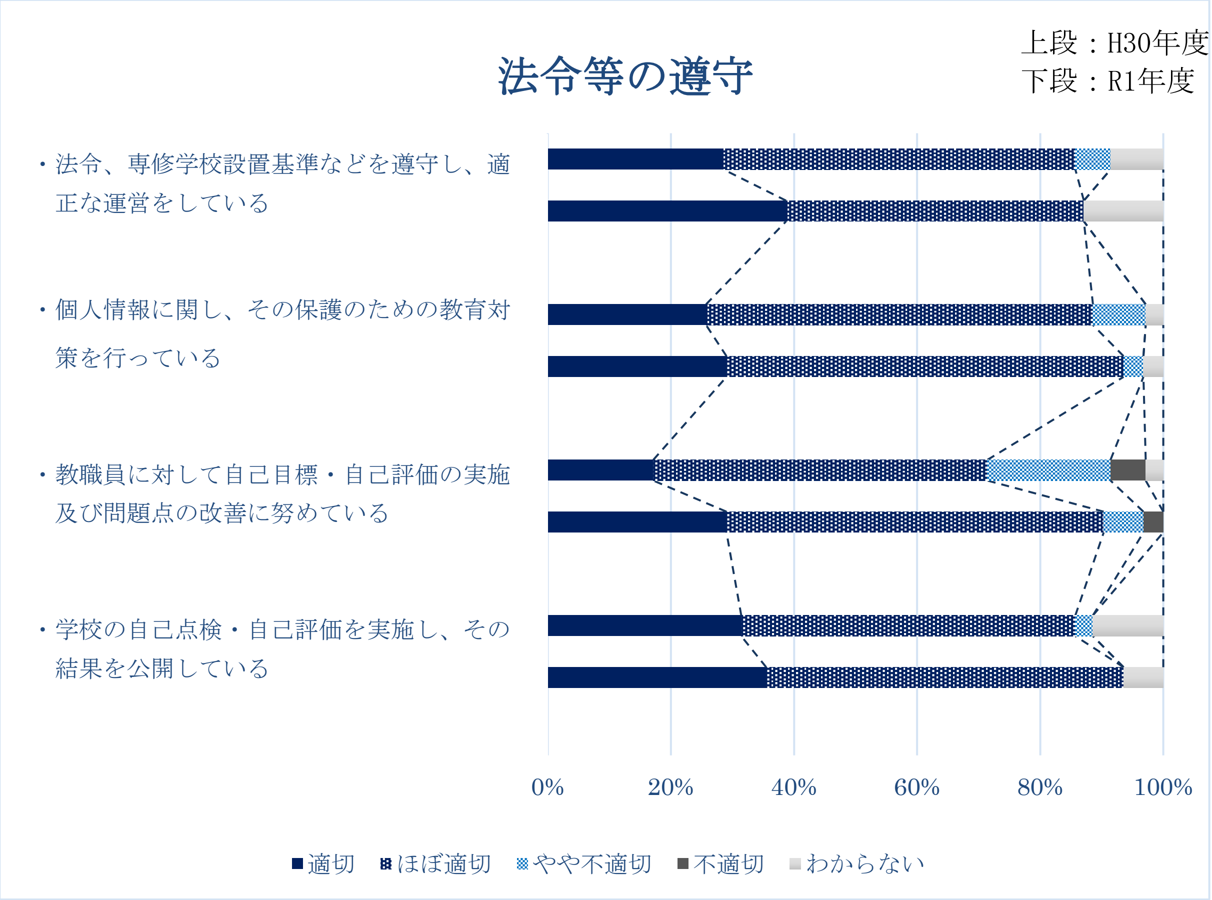
自己評価	外部評価
「学生の募集活動」「資格取得・就職状況などは正確に伝えている」に関しては、「適切」「ほぼ適切」が96%以上であった。学校全体として、オープンキャンパス４回の実施がこれに反映している。例年に引き続き、より詳細な学科の紹介もできていることに加えて、各種広報媒体により成果をあげていることが推察される。今年度は高校訪問を２か月早め行ったことも募集活動の成果を得た。助産では卒業前には、NCPR、母体急変時の初期対応など助産師にとって必要な認定資格の機会を与えていることや助産学科の特色を募集要項に載せた。また、各課程の在校生のメッセージにも学校と学生の良さを PR しているなど、パンフレットに工夫がみられた。今後も内容を吟味し印象に残る学校となるよう工夫していきたい。資格取得・就職状況の伝達 についても、ホームページへの掲載とオープンキャンパスで説明を充実し、より学生募集に繋げたい。「授業料等は妥当なものとなっている」に関して「適切」「ほぼ適切」が約 93%である。学習者への金銭的負担を配慮し、各種、奨学金の紹介に尽力している結果と考えられる。今後２年課程、准看護科が募集停止になるため３年課程と助産についてのより積極的な PR の充実が必要である。	種々、適切な取組が奏功していると拝察いたします。しかし、今年度はコロナ禍ということで、例年以上の工夫が必要かと存じます。本校もインスタグラムを開設し動画や行事の取組を掲載、YouTube において紹介動画の配信、Zoom によるリモート説明会等を実施するなどしております。 学生の確保として、３年課程や助産の PR を工夫して頂きたい。 医師会の教育のこだわりを強調し学生確保に努力いただきたい。 今は新型コロナウイルス感染症の影響で難しい部分もありますが、地域以外の高校等にも出向きＰＲされてはと思います。学生達の元気な笑顔は各方面でも評価され募集に関係されると思います。

（６）経営管理
ア　財務



自己評価	外部評価
事業報告は、学習環境・教育教材等必要なものは計画的に購入が進められ合同会議等で報告がされているため、「適切」「ほぼ適切」が 87％と向上している。しかし財務状況については、「やや不適切」「わからない」が 23％とやや増加しており、今後も継続して報告を行い、教員の意識付けをしていく必要がある。	引き続き、一層の向上に向けて推進されますよう願っております。 適切に管理されていると思います。

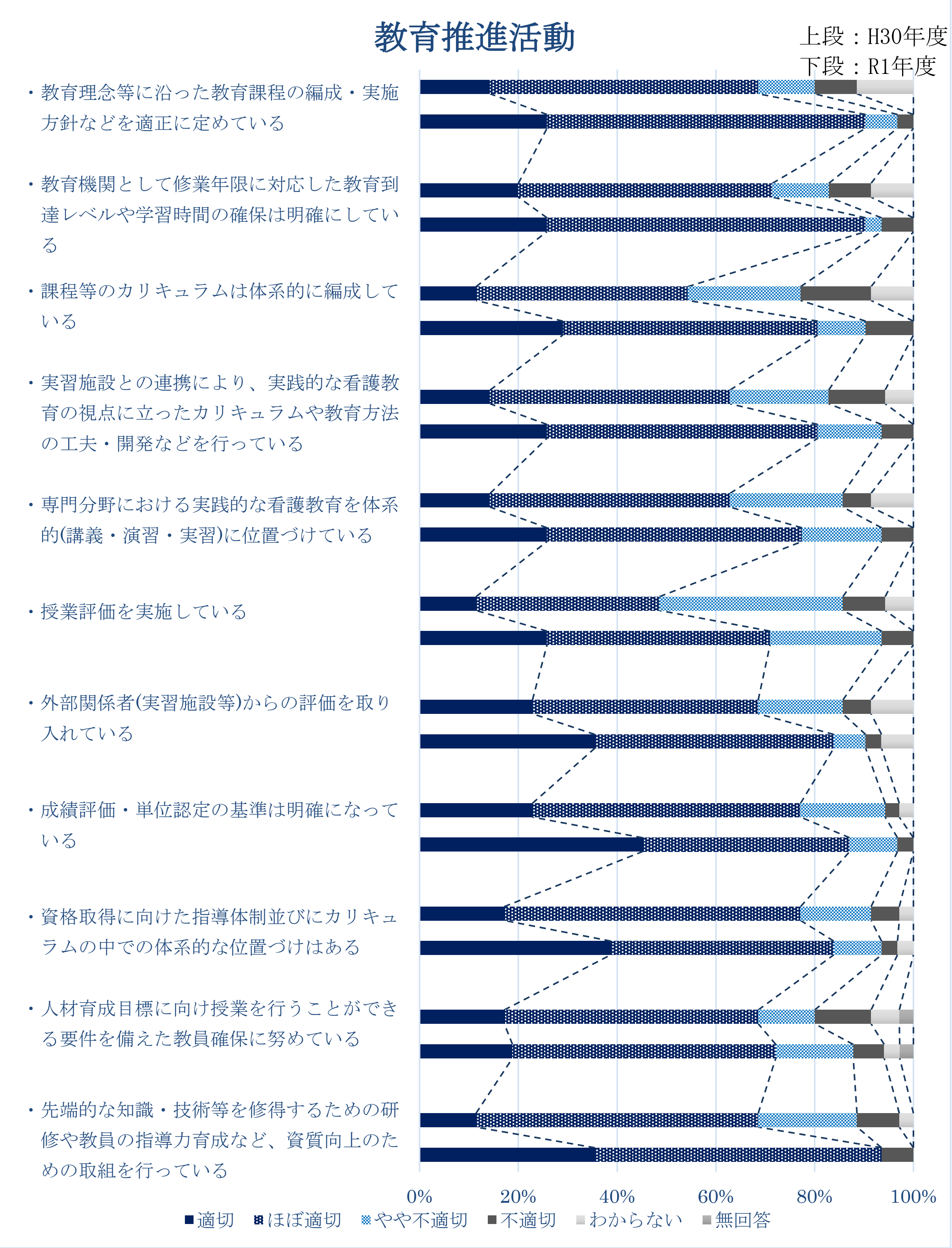
イ　法令遵守



自己評価	外部評価
全ての項目において「適切」「ほぼ適切」が 80%以上であり、特に教職員に対する自己点検・自己評価の実施及び問題点の改善については、「適切」「ほぼ適切」が 71%から 90%と向上している。これは自己点検・自己目標の評価内容を、現状に沿った内容となるよう検討し、新入職者への説明を行ったことにより改善したと思われる。 今後も継続して学校運営に関する内容について、情報が浸透していくよう新人研修・会議等で強化していく必要がある。	引き続き、一層の向上に向けて推進されますよう願っております。 適切に管理されていると思います。

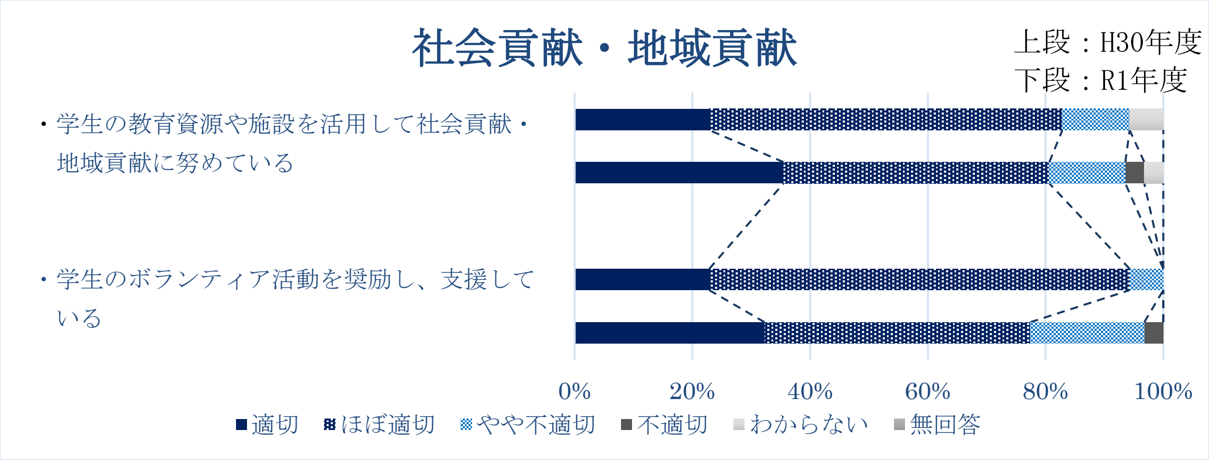
Ⅲ. 教育活動

（１）教育推進活動



自己評価	外部評価
全ての項目において、「適切」「ほぼ適切」を合わせた割合が上昇し、全体の 83%であり教育活動はほぼ適切に行われていると考える。 特に、「課程等のカリキュラムは体系的に編成している」、「授業評価を実施している」、「先端的な知識・技術などを修得するための研修や教員の指導力育成など、資質向上のための取組みを行っている」の項目では 25 パーセント前後の上昇がみられている。また、「わからない」は、11 項目中 8 項目が 0%となっていることからも、教育推進活動に関する教員の認知・理解・意識が高まっていると考える。 授業評価に関する項目では、学校あり方検討会にて授業評価の見直しが行われ、その内容が、会議での説明などを介して教員間でより共有され、学生からの評価を踏まえた授業の質の向上の必要性が認知されてきたと考える。現在、外部講師の授業評価に関する取り組みが行われている。授業評価についての認識はより得られてきたと考えるが、どの程度の外部講師が取り組んでいるのか不明瞭なことは課題である。 「人材育成目標に向け授業を行うことができる要件を備えた教員確保に努めている」では、他の項目と比較すると「適切」「ほぼ適切」の上昇の割合は最も低い。また、各課程の自己評価の分析内容は、対照的な部分も見られた。その要因として、実習指導を行いながらの授業で授業準備に費やす時間の確保や相談する機会が得にくいことが挙げられる。そのことから科の特性や教員の傾向に合わせた支援が求められていると考える。 昨年度、54%まで低下していたカリキュラムの編成に関しては 80.6%まで上昇している。カリキュラム改正に向けて教育内容とその展開などの検討により各教員が参加し、よりカリキュラム編成に関する理解が深まったと考えられる。	カリキュラム編成における肯定割合が飛躍的に向上したことは素晴らしいと存じます。引き続き、一層の向上に向けて推進されますよう願っております。 全ての項目で適切・ほぼ適切が上昇しており、教員への周知が行き届いていると思います。前年度まで低値であった授業評価の実施についても 70%程度に上昇し、教員の理解と周知が得られていると思います。 前年度と比べましても努力されており、今後も頑張っていただきたいと思います。

Ⅳ. 社会貢献・地域貢献・国際交流



自己評価	外部評価
「学校の教育資源や施設を利用して社会貢献・地域貢献に努めている」では、地元の高校の校外実習を計4回の受け入れ、学校主催の看護職対象の研修会を1回開催した。また、京都府看護協会、京都府助産師会、関係学会等の役員、理事、講師等を引き受けそれぞれが任務を遂行している。昨年度の評価では約 80%が肯定評価であったが、今年度は全体の肯定評価の割合がやや低くなっているものの、適切の割合は倍増している。引き続き次年度も社会貢献、地域貢献に努めたい。「学生のボランティア活動を奨励し、支援している」では、日々の朝の立ち当番での挨拶運動、学校玄関前での花の整備、清掃活動などを通して地域の人々との交流に努めている。又、学校祭でのバザーや古本市は地域の方々にとって恒例行事の一つとなっている。その他、看護の日の行事に併せた活動、献血、夏祭りなどのお手伝い、出張授業（性教育実践）など毎年の恒例行事として積極的に行っている。このような実績を踏まえ、昨年度では、95%が適切、ほぼ適切と肯定評価の割合が高かったが、今年度は 77.4%と肯定評価の割合が低くなっていた。その原因については、同時期に複数のボランティア依頼がくることによって学生数が減少した本校にとってボランティアを募ることに苦慮することがあるためと考えられる。可能な限り、ボランティア依頼が重ならないようにすること、同時期の複数施設からの依頼について人数を調整する必要がある。また、教員がボランティアを募る際は、興味関心を持てるような案内の工夫も必要である。	肯定割合が低下したということですが理由が明確であり、やむを得ないという面もあるのかなと拝察いたします。鋭意工夫され、少しでも挽回できる方法について研究いただければと存じます。 地域包括ケアシステムの中で、地域との連携は看護師として必要であり在学時の取り組みは意義がある。 全職員に活動の公報を強化・活動は問題ないと思います。 社会貢献するということは将来にとっても必要なことだと思います。 清掃活動、ボランティア活動等積極的に取り組まれている姿勢は高く評価したいと思いますし、今後も続けていただきたい。必要であれば保護者も協力できることはさせていただきたいと思います。

【洛東高等学校健康福祉コース　実習受け入れ】
２年生→2 年課程　2 回、　3 年課程　2 回
【洛東高等学校】
性教育　助産学科 11 期生　1 回
【ボランティア活動】
おおやけの里ふれあい祭り　10 名
「やったね！秋まつり」京都市やましな学園企画　12 名
洛南病院　音楽祭　6 名

【講師派遣】
京都府看護協会

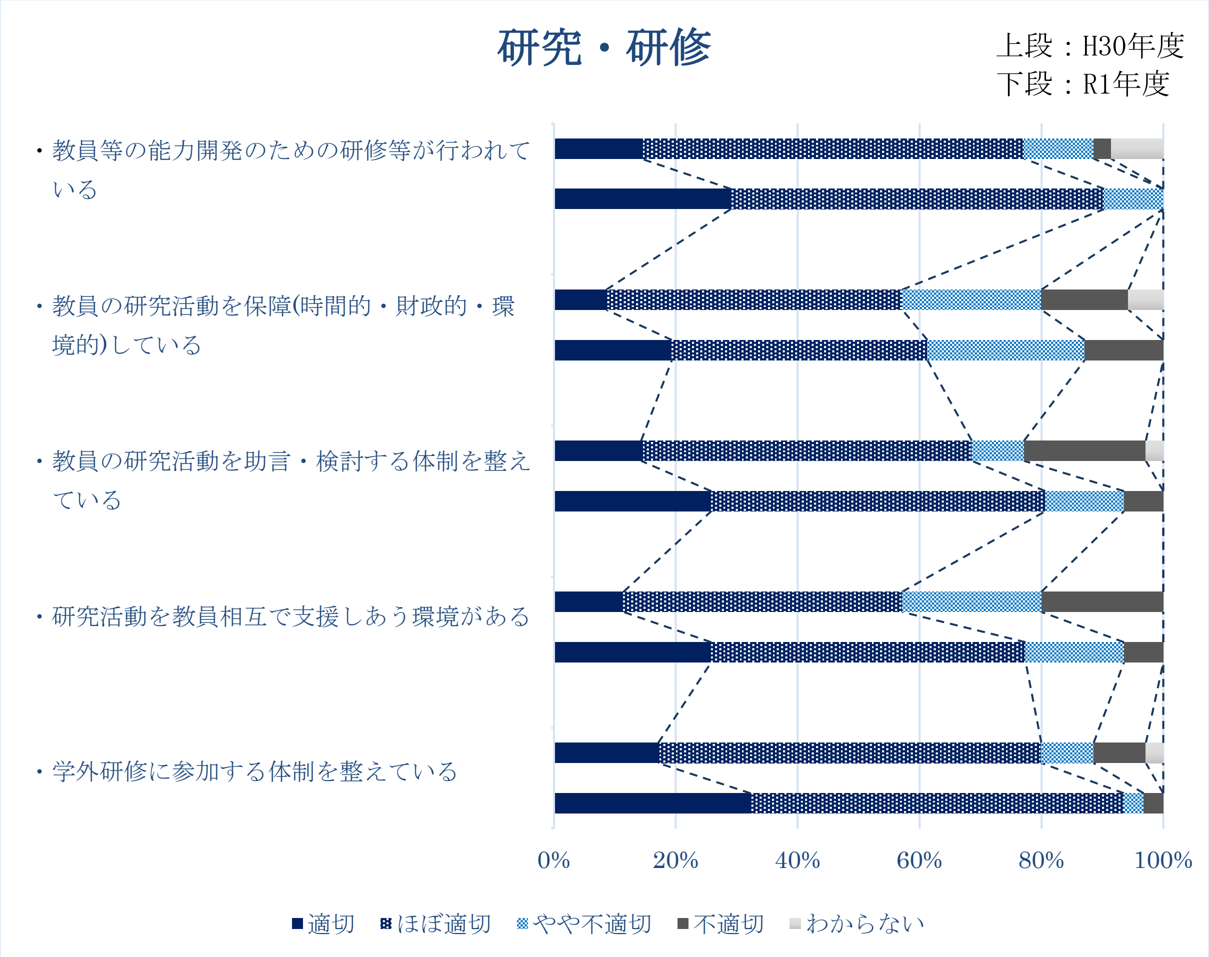
専任教員養成講習会	令和元年4月～12月		
		看護論・看護論演習	奥山幸子
		２年課程の教育制度	加悦浩美
		看護教育方法演習	奥山幸子
		看護教育方法論：母性看護学	秋山寛子
		母性看護学演習	秋山寛子
		在宅看護論演習	加悦浩美
実習指導者（看護師）講習会	令和元年10月～12月		
		看護論	奥山幸子
		2年課程の教育制度	加悦浩美
		母性看護学臨地実習	秋山寛子
		実習指導の実際演習	秋山寛子
		実習指導の実際演習	廣澤紀代

准看護師キャリアアップセミナー「看護の動向とキャリア支援」　奥山幸子
いきいき働こう新人准看護師！！
看護計画と看護記録～日頃の悩みを解消しよう　奥山幸子
京都府立洛南病院
「臨床実習における看護過程の展開とその指導ポイント」　橋本登喜子
洛和学園　実習指導者講習会　看護教育課程（２年課程）　加悦浩美
京都府立木津高等学校　分野別模擬授業（看護専門学校）　岡田弘美
環太平洋大学　看護教育課程演習Ⅰ・Ⅱ　奥山幸子

【学会/職能関係】

京都母性衛生学会理事・副編集委員長	秋山寛子
京都府助産師会理事	秋山寛子
京都府看護協会推薦委員	守屋嘉奈子
京都府看護協会准看護師制度特別委員	奥山幸子
山科保健センター運営協議会委員	奥山幸子
京都府専任教員養成講習会準備運営委員	奥山幸子
日本看護学教育学会第 29 回学術集会企画委員	奥山幸子
日本看護学教育学会第 29 回学術集会実行委員	秋山寛子
	岡田弘美
	廣澤紀代
	北西富江
近畿ブロック研修会実行委員副委員長	秋山寛子

V. 研究・研修



自己評価	外部評価
研究･研修に関する項目では､｢能力開発のために研修が行われている｣､｢研究活動を助言・検討する体制を整えている｣､｢学外研修に参加する体制を整えている」の 3 項目で約 80%～94%が肯定評価であった。一方で､｢研究活動を保証（時間、財政、環境)｣､｢研究活動を教員相互で支援しあう環境がある｣の 2 項目については、約 60%～74%と 3 項目に比して肯定評価が低かった。しかし、昨年度よりは適切の割合が高くなっていることからも引き続き時間の保証、支援を行っていく。特に研究活動の時間の保証は学校として作っていく必要がある。支援についても行き届いていないと評価している教員がいることからも、研究チームの編成の工夫やチームへのアドバイスができる教員を配置するなどの工夫が必要である。なお、研究発表、研修参加の実績は別紙に示す。	様々な技術革新が日進月歩で進む業界であり、教職員の皆様の研究・研修は不可欠であると存じます。引き続き一層の向上に向けて推進されますよう願っております。 教員の方々への、研究活動における保証支援は検討が必要と感じた。教員の離職率は、高くなっていないのでしょうか？ 時間の確保と教員同士の協力や支援体制を獲得できるよう、継続して取り組まれることで良いと思います。 学外教育研究・研修への参加はなかなか難しいとは思います。それでも参加する体制を学校側で整えられているということは、教員の皆様は忙しい中でも本当に努力されていると思います。

【学校内】
学校　　　研修会　「学生のみかたと教え方―ともに育つ指導のコツ」
　　　　　　　　　　　講師　京都大学医学部附属病院　総合臨床教育・研修センター
　　　　　　　　　　　　　　助教　内藤知佐子　先生

新人教員研修　　　4 月 3 日（火）～6 月 16 日（土）5 日間　２名
教員研修　　　　　8 月 6 日（月）　27 名
研究授業　　　　　平成 31 年 4 月～令和 2 年 3 月　2 名
公開授業　　　　　平成 31 年 4 月～令和 2 年 3 月　2 名
シンポジウム　　　12 月 23 日（月）「未来を語ろう　京都府医師会看護専門学校」
研究発表　　　　　3 月 24 日（火）8 演題
長期研修報告会　　3 月 24 日（火）京都府教員養成講習会　2 名

【学校外】
1．学会発表
日本看護学教育学会第 29 回学術集会（京都）
　「男子看護学生の学校生活に関する文献検討」
　　　　　　　　奥山幸子・廣澤紀代
第 31 回日本看護学校協議会学会（香川）
　「ブラインド方式の教職員防災研修の実際：第 1 報―失敗体験からの学び―」
　　　　　　　　奥山幸子・秋山寛子・中川昌男・山村康夫
　「ブラインド方式の教職員防災研修の実際：第 2 報―失敗体験からの学び―」
　　　　　　　　秋山寛子・奥山幸子・中川昌男・山村康夫
第 50 回日本看護学会-ヘルスプロモーション-学術集会（長野）
　「看護学生の児童虐待への意識の変化～縦断的調査を行って～」
　　　　　　　　奥山幸子・橋戸好美・西雄浩子
日本看護倫理学会第 12 回年次大会（大阪）
　「基礎看護学実習Ⅱにおける医療安全に関する事例を用いたオリエンテーションでの効果
　　　ー学びのレポートの内容分析ー」
　　　　　　　　市場千尋・奥山幸子

２．学会・研修会等参加
【長期研修】
日本看護学校協議会教務主任養成講習会　　　1 名
京都府専任教員養成講習会 4 月～12 月（京都）2 名

【短期研修】
第 29 回日本看護学教育学会（京都）10 名
第 50 回日本看護学会-看護教育-（和歌山）1 名
第 50 回日本看護学会-ヘルスプロモーション-（長野）2 名
第 2 回日本助産診断実践学会（滋賀）1 名
第 31 回日本看護学校協議会学会（香川）2 名
日本看護倫理学会第 12 年次大会（大阪）1 名
日本看護学校協議会教育研修会（東京）2 名
日本看護学校協議会近畿ブロック研修会（大阪）5 名
大阪府看護学校協議会：看護基礎協にかかる指定規則改正に向けて（大阪）9 名
日本精神科看護協会研修会 1 名
京都府看護協会　短期研修　15 名
京都府看護学校連絡協議会 4 名
京都橘大学看護教育研修 1 名
日総研研修会（大阪）2 名

日総研研修会（名古屋）1名
照林社研修会（大阪）1名
さわ研究所教員セミナー（大阪）1名
MC メディカ出版看護教育力 UP セミナー（大阪）1名
日本セクシュアルマイノリティ協会研修会（大阪）1名

３．論文・執筆等

村上友美・宮下ルリ子・宇野友美・北西富恵・辻陽子：シミュレーション教育虎ノ門[座談会]ファシリテーションの道はすべてに通じる．看護教育 60（8）．648-654．医学書院.2019.

小林身哉・大久保恵美子・岡田弘美他：准看護師試験全科攻略チェックブック.看護学生 67（3）.89-93.メヂカルフレンド社.2019

奥山幸子・秋山寛子・中川昌男・山村康夫：ブラインド方式の教職員防災研修の実際第１報－失敗体験からの学び－.日本看護学校協議会雑誌 50．180－181．2019

秋山寛子・奥山幸子・中川昌男・山村康夫：ブラインド方式の教職員防災研修の実際第２報－A 校における防災上の課題－.日本看護学校協議会雑誌 50．182－183．2019